



東北小だより

開校57年目

新座市北野3-1-1 TEL 048-471-2022
HP <https://e-tohoku-c-niiza.edumap.jp/>

～学校教育目標～
なかよく元気な子
よく考える子
すすんで働く子

令和7年度6月号
全児童数 788名



小さな虫から科学の芽が

～ 美しく 温かく 常に前進 東北小学校 ～

校長 斉藤 直之

先日、グラウンドを歩いていると、子供たちが何かを探しています。覗いてみると、そこには、ありの行列がありました。子供たちは、その行き先が気になるようです。その様子を見て、私は、「ありの行列」のお話を思い浮かべました。このお話は、3年生の国語の教科書に掲載されている説明文で、子供たちも興味をもって読み進める話です。簡単に言うと、「ありは、ものがよく見えません。それなのに、なぜ、ありの行列ができるのでしょうか。」というお話です。本に登場する科学者のウィルソンが、様々な実験を通して、そのなぞを解明していくというお話です。

さて、皆さんは、『ファーブル昆虫記』をご存知でしょうか。「ファーブル」という虫が大好きな学者が、いろいろな虫を約60年間観察して書いたものです。

そのファーブル昆虫記の特集第一弾は、フンコロガシの話です。この虫は、日本にもいるコガネムシの仲間で、フンを玉のようにまるめて転がすことから、このように呼ばれています。小学生の頃、本を読んでいて、気が付かずに通りすぎてしまいそうな小さな虫も、観察したり、研究したりするとずいぶんいろいろなことがわかるのだなと考えたものです。

そして、この本を読んでいくうちに、フンコロガシの生活のしかたをくわしく観察することで、大自然の秘密までがだんだんわかっていくことに、驚きました。また、世界は謎に満ちていて、その未知のこと、わからないことにとことん取り組む、学者としてのファーブルの生き方が素敵だなと感じました。

フンコロガシという、おもしろく、この何ともゆかいな虫の、かくされた姿に、『ファーブル昆虫

記』を読んでいると、フンコロガシを愛おしいものに感じられてきたものです。

私がこう感じたのは、たぶん、ファーブルの眼差しによるものだと思います。ファーブルは、虫を愛すべきものとして見ていました。「ふん」に群がる虫を研究する。それだけでも感動してしまいます。私たちには、「ふんはきたないもの」という思いこみがあるけれど、ファーブルは、そんなことにとらわれません。とことん調べます。そして、この世の中の生き物が持っている習性や特性を、どんどん発見していくのです。どきどきしながら、本を読み進めていった記憶があります。自然界にはどれだけのふんがあるのか。それらをふん虫は食べ、利用し、掃除する。しかも、この「仕事」には、いろいろな生き物が参加している。ふんも、動物さえも、ものの見事に解体され、消化されていく。このことは、今でもすごい研究だと思っています。

そして、「私たちは、この大きな自然のメカニズムの中で生きているのだな」とつくづく考えさせられるのです。

ファーブルの一つのことに打ちこんでいく姿。まっすぐな生き方。これは、誰もがそうできることではありません。

私が子供の頃は、アスファルトの道路も少なく、土の道路も多くあったので、学校の帰り道には、道草をして、アリの巣穴を掘ってよく遊んだものです。時代が変わり、環境は大きく変わっています。しかし、身近なところには、まだまだ「なぜかな」と考えられることは、多くあると思います。そのような「なぜ？」の想いを大切に。

ファーブルのように「探求心」をいつまでも、もちたい、もたせたい。いつまでもあくなき探究心を。自分自身も再確認しました。